

中国派遣レポート

2019年11月～2022年2月 矢部 紬



はじめまして！埼玉県出身の矢部紬です。私は2019年11月から2022年2月まで、青年海外協力隊の日本語教育隊員として中国に派遣されていました。中国では、高校生に日本語や日本文化を教えてきました。



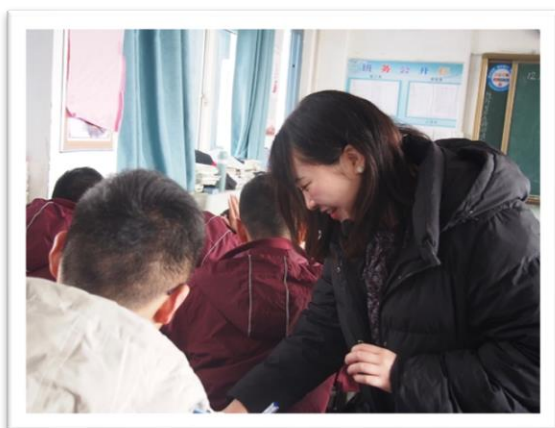
中国江蘇省流（ジュツ）陽県

日本のお隣にある中国。日本との時差は約1時間。飛行機に乗ると成田から北京まで約4時間で行くことができます。私が派遣されていたのは中国の東に位置する江蘇省宿遷市流（ジュツ）陽県です。流陽県は小さな県ではありますが、人口が約198万人と多く、現在はマンションやショッピングモールなどの建設がどんどんと進められています。その一方で、自然が多く「花・木の故郷」と呼ばれており、春になると色とりどりの花を見ることができるとてもどかな場所です。また、夜になると町のいたるところに食べ物の屋台が並び、賑わいを見せます。「朝牌」というナンのような食べ物が有名で、朝食によく食べられます。流陽に外国人は少なく、私は唯一の日本人として生活をしていました。



建陵高級中学での活動

私は約2年間、建陵高級中学という高校で日本語や日本文化を教える活動をしてきました。私が活動した建陵高校では約4710名の高校生が学んでいます。生徒は入学と同時に英語か日本語のどちらかを選び、3年間勉強します。全校生徒の約半数に当たる1987名が日本語を第一外国語として勉強していました。日本語を勉強する理由は、アニメが好きだから、歌舞伎や着物など日本の伝統文化に興味があるから、J-POPに興味があるからなどそれぞれですが、一番の理由としては大学入試で日本語を選択するためです。中国では田舎と言われる瀋陽県。両親が大きい都市に出稼ぎに出ている生徒も多く、日本語を学ぶことで少しでもいい大学に進学したいと生徒たちは毎日勉強を頑張っています。



私はそんな生徒たちに日本語の授業をしていました。主に会話やリスニング、作文の授業を行っていましたが、日本の文化を紹介する授業やイベントも実施しました。

特に浴衣の着付け体験や季節の行事紹介、日本の遊びの授業はとても人気がありました。浴衣の着付けの授業では、私が一度お手本を見せると生徒たちはあっという間に自分で着られるようになりとても驚いたことを覚えています。かるた大会を行った際は、かるたが破れるほど白熱した戦いが

繰り広げられました。また、オンラインで日本の高校生との交流会も開催しました。日本のアニメや趣味、高校生の生活などをテーマに日本語を使って会話をしました。始めは緊張していた様子の生徒も自分の日本語が伝わったことで自信を持ち、楽しそうに会話をしていました。日本の高校生からも「中国の高校について知ることができた！」「中国のイメージが変わった！行ってみたい。」というコメントをいただき、異文化理解に繋げることができたのではないかなと思います。他にも 2020 年東京オリンピック応援歌のパブリカをみんなで踊ったり、日本文化を伝える新聞を月に一度発行したり、生徒との交流を行ってきました。



活動を終えて

「吃饭了吗？（ご飯は食べた？）」中国にいるときに毎日掛けてもらった言葉です。中国では「こんにちは！」のようにこの言葉が使われています。相手が食事をとったか気遣うとても温かい挨拶だなと感じます。私が活動した流陽県は小さな町ということもあり、外国人が少なく、日本人はたった1人しかいませんでした。町中や学校で「外国人（日本人）を初めて見た！」と言われることも珍しくありません。そんな初めて見た外国人の私にも地域の方々はとても優しく接してくれました。1人で寂しくないようにと誕生日にはパーティーを開いてくれたり、家族で集まる大切なお正

月の集まりにも私を誘ってくれたりしました。思い返すと2年間の生活の中で嫌な思いをしたことは一度もありません。中国で活動や生活をする中でたくさんの方の温かさに触れ、人と人の繋がりの大切さを改めて感じました。また、日本から離れた場所で日本語を一生懸命勉強する生徒たちの姿をみて、私も負けてられないな、頑張らないと！と勇気をもらいました。どうしたら生徒に楽しんでもらえるか、役に立てるか、とても悩みながらの活動でしたが、授業後に「楽しかった！次の先生の授業はいつ？」と声をかけてもらえると、中国に来てよかったな、やってよかったなという気持ちになりました。私は活動を終えて日本に帰ってきましたが、中国での経験を周りの人に伝えていく活動や中国で出会った方々との交流はこれからも続けていきたいと思います。とても貴重な経験ができた2年間でした。

